

## 論文の和文要旨

論文題目

エドゥアール・グリッサン  
「反-歴史」の詩学

氏名

中村隆之

この研究は、エドゥアール・グリッサンに見られる「過去の回復」という必ずしも自明ではない主題を考察することを目的としている。とくに取り上げる作品は、小説『第四世紀』（1964年）と評論集『アンティエユ論』（1981年）である。前者はマルチニックと目される島の「歴史」に焦点を当てたグリッサンの最初の小説である。また後者はマルチニックを事例にアンティエユ諸島の抱える諸問題を多角的に論じた、唯一の政治社会的評論集として知られる。そのなかで主に対象とするのはアンティエユの「歴史」を考察した評論である。

第一章「物語りえぬものの歴史」では、グリッサンの「過去の回復」という主題を現代の知的・認識的状况から考察するために、「歴史」を物語り行為という言語活動として捉える、いわゆる「歴史の物語り論」を参照項に考える。ここで参照するのは、とくに、野家啓一『物語の哲学』を中心に展開された歴史認識をめぐる諸議論である。それらの議論を参照することによって、グリッサンの「過去の回復」の試みが、物語り行為から逃れてしまう、「過去の異他なるもの」を取り戻そうとする、(不)可能な試みであることを明らかにする。

第二章「反-歴史」の詩学」では、『アンティエユ論』から「歴史」との争い（1976年）を中心に取り上げ、グリッサンの歴史論を概括する。グリッサンによれば、諸地域の「歴史」は、大文字にして単数で記される「歴史」との関係において規定される。大文字の「歴史」とは、グリッサンの詩学では、「西欧」の「歴史」を指し、「他者」を征服し還元する原理となる「一」に貫かれたものである。アンティエユの「歴史」はこの大文字の「歴史」との関係において否定されてきた。このため、アンティエユ諸島では、「歴史」を形成するのに必要な条件とされる、集合的な意識・記憶・時間が

断片としてしか見出し得ない。グリッサンはこうしたアンティーユの否定的な「歴史」のあり方を「非-歴史」と形容する。

アンティーユの「過去」は「非-歴史」のなかにとどまっている以上、誰も「過去」を思い出し表現することはできない。この困難さにおいて、グリッサンが「過去」を取り戻すための方法上の理念として提唱するのが、「過去の預言的ヴィジョン」である。この理念は、靈感を受けた作家が「過去」を想像することをとおして獲得するヴィジョンを指している。換言すれば、このヴィジョンには、「現在」に残された「過去」の痕跡から、ありえた「過去」を想像するという理念が込められている。グリッサンはこの理念をとおして「非-歴史」における潜在的なアンティーユの「歴史」を言語化しようと試みる。その試みは、大文字の「歴史」を拒絶し、別の「歴史」を構想するという意味で、「反-歴史の詩学」と呼べるものだ。

第三章「過去を見る」では、前章での考察を受けて、『第四世紀』の読解作業を行う。着目するのは、二人の主要人物、マチューとパパ・ロングエにおける「過去」認識の違いが引き起こす葛藤である。ここでは「過去の回復」をとおした「主体」形成にまつわる複雑な問題が提出される。フランス植民地であったマルチニックでは、その住民たちを「主体」とした「歴史」が長らく書かれてこなかった。主人公マチューは書かれなかった島の人びとの「歴史」を書くという目的のために、忘れ去られた人びと（たとえば逃亡奴隷）の「記憶」を保持するとされるパパ・ロングエのもとを訪れる。島の人びとの「過去」を回復し「歴史」を書くことは、その人びとを「主体」とした「歴史」を書くことを意味する。『第四世紀』とは、この意味で植民地マルチニックにおける「主体」形成の物語である。

しかし、マチューによる「過去の回復」の試みには、一個の克服しがたい逆説が孕まれている。それは「論理と明晰さ」にもとづく彼の「過去」認識にかかわるものだ。マチューは過ぎ去った出来事を論理的に把握し、体系だった一個のクロノロジーを作り上げたいと考える。この論理性への嗜好は、じつはその根底において近代植民地主義の所産としての教育と切り離せない。マチューはフランス式の教育を経た植民地の知的エリートなのである。このかぎりでの彼の「過去の回復」の試みは、西欧近代的な「過去」認識にもとづいている。だからこの認識にもとづくかぎり、彼の書こうとする「歴史」は、大文字の「歴史」の摸倣に陥る。ここにマチューの探究の逆説がある。したがって、マチューが島の人びとの「過去」を回復し「歴史」を書くためには、彼が教育をとおして身につけたものを一度忘れ去る必要がある。すなわち彼の視点からは、「前近代的」にして「迷信的」にしか映らないパパ・ロングエの「過去」認識へと遡行する必要があるのだ。

語り部パパ・ロングエにとって「過去」は「見る」ことをとおして初めて開示され

る。「過去」はそれ自体としては不可視なものであるが、それを「幻視」することをとおしてしか「過去」のヴィジョンをつかむことができないのである。このパパ・ロングエの「過去」認識は、前述した「過去の預言的ヴィジョン」のイメージを提供するものである。「見る」ことは、すなわち、日常に残る意識や記憶や時間の断片からありえた「過去」を想像するということである。

したがって、アンティエユの「歴史」を制作するためには「過去の預言的ヴィジョン」にもとづく「過去」の回復が要請される。しかし、その使命を担うマチューは、「論理と明晰さ」を捨て去ることができない。これがマチューに深刻な精神危機を引き起こし、「歴史」の制作を断念させる結果となる。

第四章「逃亡奴隷・歴史・他者性」では、再び『第四世紀』を取り上げ、この小説において中心的に描かれる「逃亡奴隷」の表象について論じる。従来のグリッサン研究は、「逃亡奴隷」を「絶対的な拒否者」と「抵抗の主体」という位相の異なる二つの表象を付与してきた。この章では、部分的に重なり合いながらも、決定的に異なるこの二つの表象をまず腑分けしたところから、「絶対的な拒否者」としての「逃亡奴隷」の表象の可能性を「非-歴史」の問題系から考察する。

「抵抗」という発想は、支配する者とされる者という非対称な対立関係を前提とする。アンティエユの文脈の場合、この対立関係は、何よりも「主人」と「奴隷」の関係に求められる。つまり「抵抗の主体」として描くべきは、「逃亡奴隷」よりもむしろアビタシオン内で蜂起する「奴隷」である。それに対し、「拒否」とは、同意の形成を拒むことである。「主人」と「奴隷」の関係は暗黙の同意によって成り立っている。それは「奴隷」にとっては強要された同意であり、非対称なものだ。「逃亡奴隷」とは、この関係そのものを拒絶する者である。つまりグリッサンは「主人」と「奴隷」という強要された関係そのものを拒否する者の表象として「逃亡奴隷」を捉えているのである。したがって、グリッサンが「逃亡奴隷」を中心的に描く理由は、「主人」と「奴隷」の関係、すなわちアビタシオンの世界に対する絶対的な拒否から「歴史」を構想するためなのである。

しかし、「絶対的な拒否者」としての「逃亡奴隷」は、同時に、表象そのものの「絶対的な拒否者」でもある。このことにアプローチするためには、グリッサンの文学的企図に孕まれる逆説について強く意識しなければならない。すなわち、「非-歴史」の状況にあっては、「過去」は「現在」とは決定的に切り離されているため、物語ることができない「異他なるもの」にとどまり続ける。物語り行為は原理的には理解可能性にもとづく営みである以上、その理解可能性の「外」にあって、「異他なるもの」にとどまる「過去」を取り戻すこと、言いかえれば、物語りえない「過去」を物語り行為のうちで示すことが、グリッサンにおける「歴史」の構想の出発点であった。

そうであるならば、物語り行為の「外」にとどまり続ける「逃亡奴隷」は、その存在を自体的に知ることができない、不可能なものの表象であると言えよう。このためにグリッサンは「逃亡奴隷」を自体的に書くことはできない。つまり「逃亡奴隷」を書くことは、従来の解釈を許すような「逃亡奴隷」の「物語」を作り出すことである。しかしグリッサンは、逆説的にも、この物語化の作業を通して、物語ること、想像することが不可能な地点を書き込もうとする。その地点とは、「逃亡奴隷」ロングエが植民地生まれの女性奴隷ルイズとコミュニケーションをする二つの場面に見出せる。これらの場面には書きえないもの、想像できないものに直面した書き手の沈黙や説明しえない偶然性が書き込まれている。グリッサンが逃亡奴隷という不可能なものの形象を通じて示そうとするのは、僅かに垣間見えるに過ぎない「過去」の（不）可能なヴィジョンなのである。「過去の預言的ヴィジョン」という靈感的直観によって開示される「過去」のヴィジョンが書き込まれる地点というのは、この書き得ないものに遭遇した時にかろうじて見出せるものなのである。

最後に、終章では以上の考察から導出される今後の展望として、とくに『第四世紀』以降のグリッサンの小説において「過去の回復」という主題がどのように模索されているのかを考える。この主題は、小説『マルモール』（1975年）、『奴隷頭の小屋』（1981年）においては、より悲観的な仕方で模索されるが、『マアゴニー』（1987年）を転機にこれまでとはまったく異なる仕方で探求される。したがって、『マアゴニー』以降の彼の小説作品にかんしては、この小説において初めて提示される「全-世界」という彼の後期の詩的ヴィジョンとの関係において考察されなければならない。それは今後の課題である。